

上越市高田地区の中心部に料亭「長養館」(同市寺町2)はある。冬はキジが鳴き、春には藤の花が揺れる700坪の庭は、近くの繁華街のにぎわいを吸い込み、客を穏やかに迎える。城下町、軍都、そして戦後の復興と、姿を変える高田

にいがたの老舗 100年の系譜

の歩みを映すように、老舗では時代の要人や地域の人々が宴を張ってきた。長養館の源流は、江戸時代、高田城下の田端町(現仲町)に店を構えた「吉原屋」にさかのぼる。吉原屋の創業年は不明だが、当時の田端町は高田藩

宴に時代映す

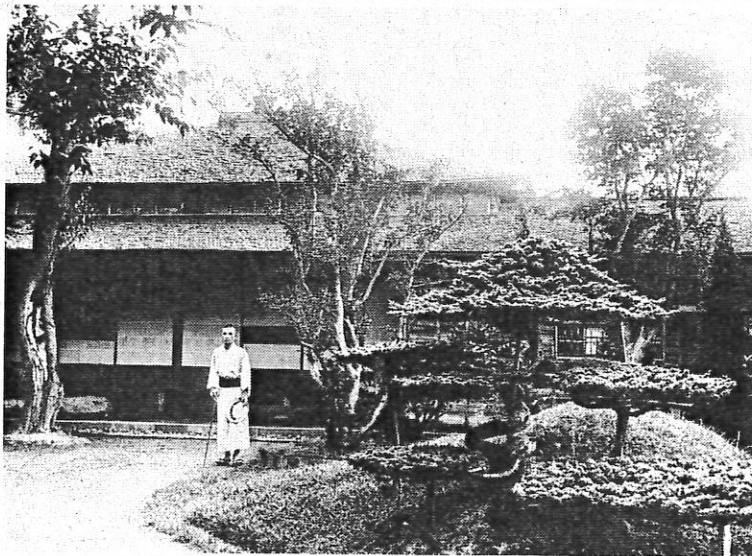
長養館

(上越市)①

城下「魚の町」に創業

サンデー経済

の城下町政策で魚の売買が特権的に許された地域。辺りなどの店の多くが問屋や小売りなど魚に関わる業種だったことから、長養館の吉原(治9)年の「料理営業免許耕一社長(55)は「創業当初鑑札」が残り、明治初年ま



長養館正面に立つ当主吉原和助。現在も残る庭木が写る。明治40年ごろ、上越市

明治期移転 庭園に趣向

では料理屋の形を整えていたことが分かる。

明治に入り移転の自由が認められると、吉原屋はさらなる飛躍を目指し、広い土地を探し始めた。田端町にあった店は、雁木に連なる手狭な造り。日本料理のもてなしで大切な要素となる庭を持ちたいと考えたためだった。

明治10年頃、吉原屋は田端町に近い寺町で約2千坪の土地を買う。高田藩の縮小に伴って取り壊された武

家屋敷の跡地に当たるこの場所は、城下町にありながら周囲は田畑ばかりだった。制約を受けずに理想の店を造るには、この上ない好適地のはずだった。

ところが、思わぬ問題があった。84(明治17)年に政府が建設を決めた信越線(当時・直江津線)が、吉原屋の購入地を貫くように走る計画が示された。

当時の当主、吉原和助は土地を売ることを拒んだ。だが、鉄道建設は明治政府の国策。吉原屋を利

「お客さまに長く養っていただける店になるように」と、店の名も「長養館」に改めた。

「開業式祝宴記」は9月16日から6日間、10回にわたり宴を開いたと記す。

出席者は、主を客層だった地主に始まり、田端町や寺町の住民、商人、中頸城の有力者らも信

ます」と吉原社長。結局、土地の東側約800坪を手放さざるを得なかった。和助は、限られた土地の中で最高の店づくりを目指す。書院造りの40畳の広間、親しい集まりに適した3つの小間を備えた建物は、建坪を300坪に抑えた。部屋をゆったりと囲む庭は、松を植え池を掘り、目でも楽しめる空間を整えた。

会社概要

創業	江戸時代。「長養館」としての開業は1893年
法人設立	1960年
本社	上越市寺町2
資本金	400万円
従業員数	18人
事業内容	割烹(かっぽう)、旅館業

だが、鉄道建設は明治政府の国策。吉原屋を利する寺町の住民、商人、中頸城の有力者らも信求めた。「当時、越線敷設を強く求めた。」「当時、屋の伝統を踏まえた長養館の地元紙で「吉透していただくことを伝える。原和助は非国民」と批判された。この後、長養館に新たな客筋が加わる出来事が起る。旧陸軍第13師団の高田